

復興カフェを利用した被災地巡検報告 ー現代的課題科目「環境と開発」での取り組みー

西城 潔*・小田隆史**

Active learning in a Disaster-Affected Area from the 2011 Great East Japan Earthquake:
A Case from “Environment & Development,” a University Field Excursion Course in Iwaki City,
Fukushima Prefecture

Kiyoshi SAIJO* and Takashi ODA**

要約：宮城教育大学教育学部の現代的課題科目「環境と開発」の一環として、東日本大震災の被災地である福島県いわき市において巡検を実施した。地震・津波による災害と福島第一原発の事故は、この地域の農漁業や市民生活、教育などさまざまな面に深刻な被害をもたらした。巡検で当事者の声を聴いたり被災地の現状を観察したりすることにより、多くの参加学生の被災地復興に関する問題意識や関心が高まった。巡検後には事後調査を行い、その結果を復興カフェの場を利用して発表した。

キーワード：大学教育、巡検、東日本大震災、原発事故、いわき市

I はじめに

東日本大震災から5年が経過しようとしている現在、被災の記憶や教訓を風化させず後世に語り継いでいくためには、学校教育のはたす役割は小さくないと考えられる。その意味で、近い将来、小中学校の教壇に立つ可能性の高い本学の学生達に、改めて震災とその影響をテーマにした学びの機会を提供していくことは重要であろう。

その一つの試みとして、著者らは、担当科目である「環境と開発」の一環として、2015年5月、福島県いわき市において「福島原発事故後の地域社会の変化と課題」というテーマでフィールドワーク（以下、巡検）を実施した。震災の福島県に対する影響を考える時、地震や津波による災害だけでなく、原発事故による環境破壊（放射能汚染）の側面を避けて通ることはできず、福島県を対象にした巡検の実施は、環境の面から開発のあり方を考察しようとする「環境と開発」の趣旨に適うと判断した。巡検後には、学生に現地での見聞にもとづいた事後調査を行わせ、その成果を教育復興支援センターの主催する復興カフェの場で発表させた。本稿では、巡検と復興カフェでの学生の成果発表の概要について報告を行う。

II 「環境と開発」の授業概要といわき巡検の位置づけ

「環境と開発」は、本学カリキュラムにおいて「従来の教科や学問分野に収まりきらない現代的な諸課題について学ぶための科目」として設定された現代的課題科目のうち、「現代世界論」という科目群に属する。国内外の環境問題から具体的事例を取り上げ、環境と開発を両立させるために必要な考え方や行動について考察することを授業目的としており、対象事例は年度によって適宜入れ替えながら実施してきた。

* 宮城教育大学社会科教育講座, ** 宮城教育大学教育復興支援センター

2015年度は、「1. 高度経済成長と公害―水俣病を中心に―」および「2. 東日本大震災に伴う福島第一原発事故」という2つの事例を扱うことにした。この2つの事例は、授業担当者の研究教育実績もふまえてオムニバスの的に設定したものであり、必ずしも両事例を貫く統一的なテーマがあるわけではない。しかし国策と密接な関わりをもつ経済活動（開発）によって引き起こされた環境破壊事例という意味での共通性を認めることもできる。授業形式としては、担当者（西城・小田）による講義に加え、学生自身の主体的取り組みを促すため、文献購読・巡検・プレゼンといった活動も取り入れた。

被災地（いわき市）巡検は、テーマ的には「2. 東日本大震災に伴う福島第一原発事故」の一環としての活動である。巡検に先立つ5月19・26日の授業では、東日本大震災における地震・津波その他の災害や、原発事故被災地としての福島県の状況について講義を行うとともに、3名の学生に、原発事故による被災状況に関する文献（山川2011; 長池2012; 山崎・生井2013）を割当て、その内容を発表させた。巡検終了後は、巡検についての感想発表とレポート作成、巡検テーマに関する事後調査と復興カフェでの発表などを行った。感想発表とレポート作成は全員に課した。また事後調査と復興カフェでの発表は、受講学生12名を3班に分けて班単位で行われた。

Ⅲ いわき市における巡検

1 当日の行程と見学地点

巡検は2015年5月30日（土）に実施した。参加者は「環境と開発」の学生12名と担当教員（西城・小田）、西城が担当する大学院の授業科目「自然地理学特論」の大学院生3名の計17名であった。交通手段として公用車（マイクロバス）を使用し、移動経路には、高線量域の通過を余儀なくされる常磐自動車道ではなく、往復とも東北自動車道・磐越自動車道を利用した。

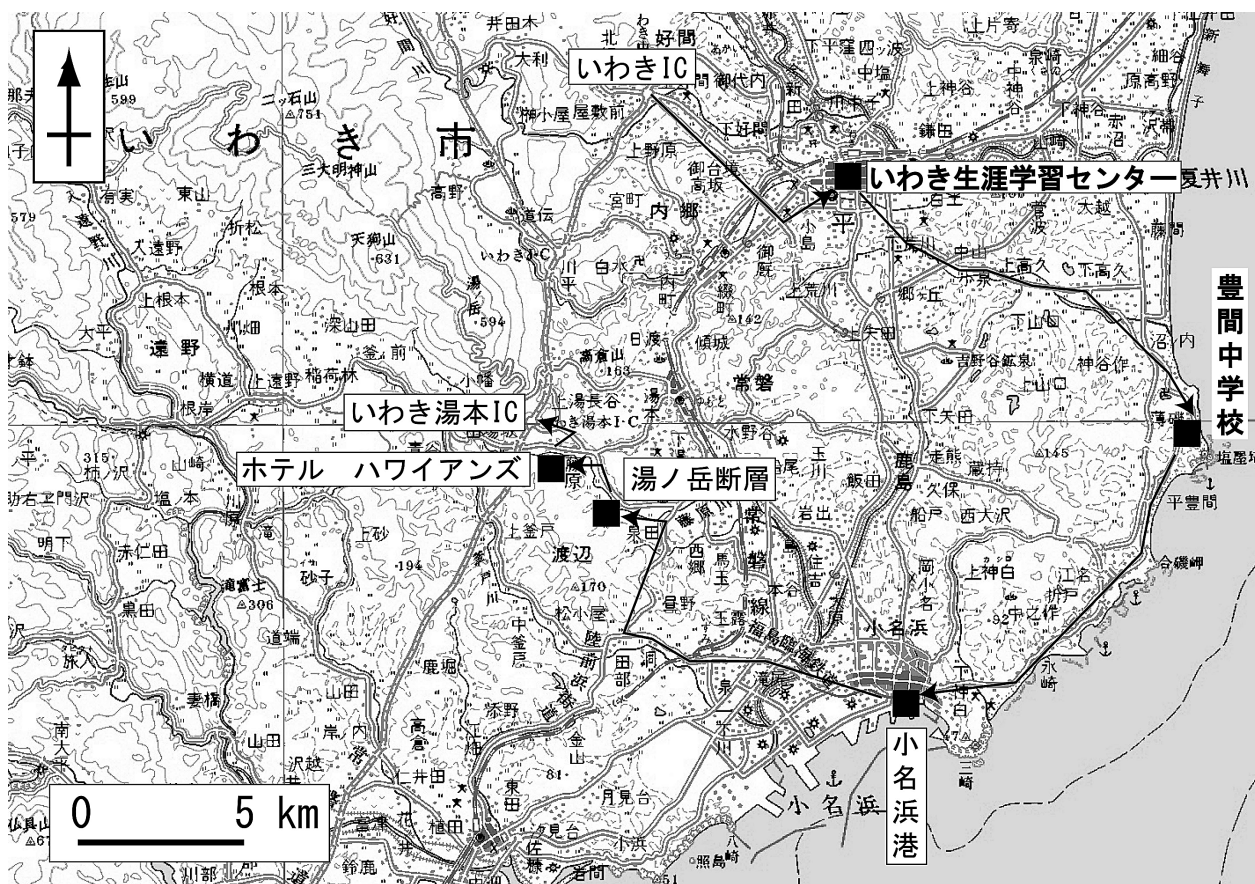


図1 主な見学地点と移動経路。（国土地理院 数値地図 200000 を使用）

当日の主な見学地点と移動経路を図1に示す。また行動概要は以下の通りである。宮教大を出発後、日程確認、資料配布、車窓からの景観説明なども適宜交えながら、約3時間でいわき市に到着した。最初の訪問地であるいわき生涯学習プラザでは、㈱いわき食彩館の職員による講演があった。またこの場で、当日の案内役のお一人である福島県教育庁いわき教育事務所主任管理主事で、本学卒業生でもある西内英理氏と合流した。昼食も兼ねて、生涯学習プラザ向かいにある地場産品販売店「スカイストア」を訪れた後、バスで沿岸部の平薄磯区にある、津波で被災した旧豊間中学校に向かった。旧豊間中学校跡地では、津波による被災状況や周辺景観を観察した。次に訪れた小名浜港では、観光物産センター「ら・ら・ミュウ」とその周辺を見学した。最後にいわき湯本ICに向かうまでの途中、2011年4月11日に福島県東部で発生した地震(M7.0)により地震断層が出現した湯ノ岳断層付近を観察した。また車窓よりホテル・ハワイアンズを見学し、帰途についた。

8:00	宮教大正門前集合
8:05	宮教大発（東北道～磐越道経由でいわき市へ）
11:05	いわき生涯学習プラザ着
11:15 ～ 12:07	「いわき食彩館」の阿部氏・松崎氏による講演と質疑応答
12:15 ～ 12:45	昼食（スカイストア）
12:51	いわき生涯学習プラザ発
13:40 ～ 13:46	旧豊間中学校校舎見学
14:10	小名浜港着（「ら・ら・ミュウ」見学）
14:50	小名浜港発（途中、湯ノ岳断層・ハワイアンズ観察）
18:35	宮教大着、解散

2 主な見聞内容

①㈱いわき食彩館の職員による講演

㈱いわき食彩館は、農産物やその加工品などの地元特産品の販売、地産地消の推進その他を主な活動目的に2008年12月に設立され、食料品小売および飲食業面で事業を展開してきた。震災後は避難所向け炊き出しや食材提供、仮設住宅での移動販売、農業生産に関わる土壌・水・農産物の放射線量測定、復興のためのイベント開催などを手掛けてきた¹⁾。

当日は、いわき生涯学習プラザを会場に、いわき食彩館の代表・松崎氏と同活動を支援してきた阿部氏から、原



図2 いわき食彩館の阿部氏（左）・松崎氏（右）による講演。



図3 スカイストアの店内。

発事故後の食の安全をめぐる苦悩や迷い、復興へ向けての取り組みと展望といったテーマについて講演をいただいた（図2）。原発事故直後、農家は「田植えをしてもいいのか?」、「種まきしていいのか?」といった迷いに陥ったこと、やがて農地の土壌や農産物の放射能測定が行われるようになったこと、復興祭などの取り組みが次第に成果を上げてきていることなど、当事者なればこそその臨場感ある内容であった。講演後20分弱にわたり、耕作放棄に対する取り組み、被害の農家間での格差、獣害の実態、復興イベントへの参加者に関する質疑応答がなされた。また上述の通り、講演会終了後、生涯学習プラザ向かいにある地場産品等の販売店「スカイストア」を訪れた（図3）。

②旧いわき市立豊間中学校

いわき市の薄磯海水浴場に接する位置にあった豊間中学校は、東日本大震災時の津波で、人的被害こそ免れたが、校舎の1階部分と体育館が壊滅的な被害を受けた（瀬谷，2015）。原口・岩松（2011）によれば、同中学校付近の浸水深は約6-7mであった。

スケジュールに余裕がなかったこと、当日も現場で復旧工事が行われていたことなどのため、十分な見学時間を確保することはできなかったものの、被災した中学校の校舎、津波被災時に教職員や生徒達が避難した高台、災害復旧工事が今なお続いている現状などを見学し、改めて津波被災の生々しさを感じることができた（図4）。



図4 豊間中学校。右写真の中央部～左側の高台が津波時の避難場所。



図5 小名浜港.

③小名浜港 (図5)

小名浜港では、飲食店、海産物や地域の特産品・土産物を扱う販売店、展示スペースなどからなる観光物産センター「ら・ら・ミュウ」とその周辺を、自由行動形式で見学した。1階には魚市場や販売店があり、2階には、「3.11 いわきの東日本大震災展」と題した展示コーナーが設けられていた (図6)。



図6 ら・ら・ミュウ館内の様子.

④その他

西内氏からは、いわき市内での移動の車中、車窓景観の説明や、震災後の福島県の学校現場の現状に関する講話を頂戴した。いわき生涯学習プラザ～豊間中学校間での移動中、車外には、仮設住宅や災害公営住宅がみられた (図7)。仮設住宅には材質・形態などの点で様々な種類がみられたが、仮設住宅は自治体ごとに作られるため、そのような違いがみられるとのことであった。また教育に関しては、いわき市と他市町村との間での児童生徒数の動き、学校の再開の状況、今後の展望について、配布資料をもとにお話があった。西内氏にとって後輩にあたる巡検参加学生に対しては、ぜひ福島県の教員採用試験を受けてほしい旨強く要望があり、震災後の福島県における教員不足の深刻さを物語っているように思われた。



図7 移動中のバスから観察した仮設住宅 (左) と災害公営住宅 (右)。

IV 巡検後の活動

1 学生の感想発表とレポート

巡検での見聞をもとに、6月9日の授業では学生各自に感想を発表させた。また7月7日を締め切りとしてレポートを提出させた。その詳細をここに紹介することはしないが、学生が巡検を通して主にどのようなことを感じていたのかを以下に示す。

まず感想発表やレポート中で触れられていた項目でもっとも多かったのが、いわき食彩館での講演、とくに震災後の食の安全確保への取り組みについてであった。なかでも、地元の人すらいわき産の食材を避ける傾向があることに驚いた、詳細な農産物のモニタリング検査により安全性が確認されても情報が正しく消費者に伝わらず風評被害が続いていることを残念に思う、復興祭などの取り組みを通じていわき産食材の安全性への理解が深まることを期待したいなどの意見が目立った。

また豊間中学校について言及した学生も多かった。震災から4年が経過するのにいまだに被災の傷跡が生々しい形で残っていること、学校の敷地が海のすぐ近くであることへの驚き、また青く美しい海の様子と厳しい被災の現実とのコントラストなど、その内容はさまざまであったが、豊間中学校で見た光景が多くに強い印象を残したことは確かなようである。また豊間中学校の印象が強かったことが影響したのか、海岸部の復興の遅れを挙げた者も多かった。

車窓から見学したに過ぎない仮設住宅に関心を抱いた者も比較的多かった。とくに「なぜ（市街地から離れた）不便な場所に（仮設住宅が）作られているのか？」といった仮設住宅の立地場所に疑問を呈する意見が多く、こうした感想は後述する事後調査のひとつの出発点になったようである。

小名浜港に関しては、比較的活気に満ちていた、復興への意気込みが感じられたといった感想が多かった。その一方で、震災から4年以上経過するにもかかわらず、魚市場に福島県産の魚が置かれていなかったことを指摘する者もいた。

これ以外には、市街地の様子、ら・ら・ミュウの資料館の展示などについての感想が出された。また巡検そのものに対しては、現地で見聞することにより初めて分かったことや気づいたことが多かったなど、その意義について肯定的な意見が多く出された。福島県の被災地を訪れたのは初めてという者はもちろん、宮城県・岩手県も含めた被災地自体に初めて足を運んだという学生もいた。また引き続き被災地に足を運んでみたい、震災の記憶を風化させたくないといった声もあった。

2 事後調査と復興カフェでの発表

学生12名を4名ずつの3班に分けて、班ごとに巡検での見聞をもとにテーマ設定をさせ、事後調査を行うよう指示した。各班が設定したテーマは次の通りである。

- 1 班「いわき市の仮設住宅と食」
- 2 班「いわき市の仮設住宅：被災者間の軋轢の現状」
- 3 班「福島県の漁業について」

各班とも、巡検での観察・見聞をもとに、資料・文献の調査、関連機関への聞き取りなどの事後調査を実施し、それぞれのテーマに関するパワーポイント資料を作成した。6月16日の授業では、班ごとに集めた資料について紹介させ、復興カフェでの発表に向けて助言を行った。とくに、巡検後に新たに集めた資料にとらわれ過ぎて現地で見たことや感じたことを置き去りにしてしまわない



図8 復興カフェでの発表の様子。

ようにという点について、注意を促した。続く7月7日の授業では、各班に発表予行演習を行わせ、改善点や発表方法に関する指導を行った。

7月14日の授業は、16:20-18:00の時間帯で226教室を会場に（通常の授業通り）、第19回復興カフェとして実施した。テーマを『いわき市の復興「環境と開発」実習報告』とし、上記3班が、巡検およびその後の事後調査の成果報告を行った（図8）。いずれの班もパワーポイント資料を用いて、各班4名の構成メンバーの全員が交替でプレゼンを行った。各班の発表内容の詳細は割愛するが、主な項目を以下に記す。なお以下の記述では、各班の作成した資料にもとづきながらも、発表の趣旨を損なわない範囲で、著者らが表現や用語の変更などの修正を加えている。

1 班「いわき市の仮設住宅と食」

- ・仮設住宅の材料や構造（福島・宮城・岩手間での比較）
- ・アンケートにみる消費者の食材購買行動の特徴
- ・福島県の農家の葛藤や努力
- ・農業の復興や食の安全性確保のための取り組み

2 班「いわき市の仮設住宅：被災者間の軋轢の現状」

- ・巡検の感想
- ・いわき市周辺における仮設住宅の分布
- ・課題設定（なぜ市街地から離れた場所に仮設住宅が作られているか？）
- ・仮設住宅建設についての考え方
- ・いわき市への避難者数
- ・避難者といわき市民との軋轢およびその背景
- ・結論と今後の課題

3 班「福島県の漁業について」

- ・福島県の漁港の復興状況や課題
- ・原発事故の魚類および漁業に及ぼした影響
- ・三陸沖と常磐沖とでの震災による漁業被害の相違
- ・福島産の魚の消費動向と風評被害
- ・震災前後での福島県における漁業経営の変化
- ・漁業従事者の心理的变化

当日は授業関係者以外の参加者もあり、発表に対して活発な質疑討論がなされた。

5. おわりに

これまで報告してきたように、著者らの担当授業の一環として、福島県いわき市を対象に被災地巡検を実施した。その目的は、「環境と開発」の観点から原発事故被災地域の実態を観察・理解させることであった。また、巡検から事後調査・発表に至る一連の活動を通して、将来的な復興活動の担い手としての意識を学生に喚起する狙いもあった。

学生は現地で熱心に観察や聞き取りに取り組んだ。感想やレポートにも示されていた通り、多くの学生が、現地を訪れたからこそその感想・意見を抱いていた。そのため各班の発表テーマは現地見聞にもとづく問題意識を反映したものとなり、学生達の事後調査への意欲的・積極的な取り組みが促され、発表内容も興味深いものに仕上がった。また前述の通り、被災地に再び足を運びたいとの意思を抱くに至った者もあり、今回の巡検は、単なる授業目的の達成にはとどまらない効果をもたらしたといえるであろう。

ただ意外だったのは、巡検で印象に残ったこととして、震災後の福島県の教育の現状を挙げた者がいなかったことである。このテーマに関しては、車中での西内氏による説明のみであったことが影響しているのかもしれないが、印象に残った場所として豊間中学校が多く挙げられた割には、学校教育への影響にあまり関心が示されなかったのは、やや気になる点である。

巡検実施に関する反省点としては、現地での観察時間の短さが挙げられよう。高線量域の通過を避けるため東北自動車道経由で往復したことにより、いわき市での観察時間は制約せざるを得なかった。移動時間を短くするために常磐自動車道を使うという選択肢もあったが、学生の中に高線量域は通りたくないとし出る者がいたことを考えると、そのルートは採用しなくてよかった。また仮にそのような申し出がなかったとしても、授業担当者として、学生に無用の被曝を強いることは適切ではなかろう。再度いわき市を対象に巡検を実施する場合には、今回の反省を生かし、宿泊での実施を考えたい。ただし被曝の問題を別にすれば、移動ルートに常磐道を採用すれば、車窓からだけでも、より生々しい原発事故被災の影響を観察することは可能であろう。

今回の経験をふまえ、引き続き大学の授業の枠組みの中で、復興支援と学生教育とをつなげていくような試みを継続していきたい。

注

- 1) いわき食彩館株式会社, 2013, <http://www.iwaki-shokusaikan.co.jp/> (2016年1月13日閲覧)。

謝辞

本巡検および復興カフェの実施に際してお世話になった頼いわき食彩館の松崎康弘代表と阿部正彦氏、福島県教育庁いわき教育事務所主任管理主事・西内英理氏、本学教育復興支援センターの教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 瀬谷貢一, 2015. 学校での災害発生時における避難や避難所対応について―東日本大震災発生時の豊間小・中学校等の事例から. 吉原直樹・仁平義明・松本行真編: 東日本大震災と被災・避難の生活記録. 六花出版, 603-625.
- 長池裕美, 2012. 原子力災害地域の現状と課題―福島県の高校から. 地理 57-5, 53-58.
- 原口 強・岩松 暉, 2011. 東日本大震災 津波詳細地図 下巻: 福島・茨城・千葉. 古今書院, 97p.
- 山川充夫, 2011. 東日本大震災・原発事故と南相馬市復興ビジョン. 地理 56-10, 34-40.
- 山崎憲治・生井貞行, 2013. フクシマからの報告―浪江町「帰還困難区域」の状況. 地理 58-12, 67-73.